

副会長からのメッセージ

JSQC の存在意義分析



東京大学 教授
飯塚 悦功

日本品質管理学会に11年ぶりに「復帰」しました。品質を主たる専門領域にしているのに復帰とは聞き捨てなりません。前回1988年10月から2年間「品質」誌の編集委員長を務めたあと学会役員を辞して、11年たって再び理事に就任したという意味です。昨年10月に開催された新旧理事の引き継ぎの集まりに参加して、浦島太郎に似た感覚を味わいながら、あらためて学会がかかえる課題に対し、複雑な心境で様々な思いをめぐらせました。

13年前に「品質」誌の編集委員長を引き受けるに際し、「SQC ニュース」に「私の提言」という短文を書きました。読み返してみたらこんなフレーズがあり愕然としました。「QC界はいま、若いころ懸命に働き、その勢いで何の気なしに投資しておいた分があれやこれやと花開き実を結び、気がついてみたら思いのほか高く評価されるようになっており、現在はそれをあてに大した努力もせずに食いつないでいる、という状況に見えてならない。」

その当時から品質管理界には構造改革が必要だったのです。高度成長経済下の品質管理と成熟経済、減速経済下での品質管理は異なります。高度成長期では、現在の枠組みの中での拡大を基本戦略とすることが可能で、品質管理においても販売量、生産量を増大させるための施策が主眼となります。もっと良いものを、もっと大量に、もっと早く、もっと速くという、いわば単純な拡大路、線絶え間ない改善が通用します。

これに対し減量時代の経営においては、少ない投資でリスクを回避し、堅実に利益を確保することが課題となり、経営合理化活動の定着・管理としての「守り」の品質管理と、経営合理化の先取りとして

の「攻め」の品質管理がカギとなります。こうしたことから現在の品質管理の重点は、重要品質問題の発生防止、回収費用の削減、PLなどのリスクの未然防止、後戻りコストの削減などであって、従来からの問題解決型の取り組みこそがますます重要になっています。

ところが注意しなければならないのは、いま求められている問題解決が、これら目に見えている問題の背後にある、問題の構造の理解に基づく問題の真因の発見であることです。いまそこかしこで混迷の様相をきたしている根元は真の原因、慢性的原因を特定する際に必要となる視点が欠如していることです。

ビジネスの環境が変化し、顧客をはじめとする多様な関係者との関係の様相が変化し、それに応じて自らの組織が有すべき「能力」が変化している中で、品質管理に求められている問題解決力は、「積極的守り」のために「自己を問い直す」という視点に基づく、他者との関係における自己の位置づけの「構造」分析です。

複雑な心境で様々な思いをめぐらせた冒頭に書きましたが、それは日本品質管理学会は、自己の存在意義を自己が関係者に提供している「価値」の視点から見直し、自らの組織構造、ひよとしたらアイデンティティーまでも変革することを余儀なくされていると感じたという意味です。

組織というものには常にこうした課題に直面しているわけで、何かの因果で副会長に選出されたのですから、これを機会にJSQCの存在意義の分析を試みようと思います。